スピノザのエチカにおける「共通概念」の位置づけ
——コミュニケーション能力としての理性について——

柴田　健志

序論

コミュニケーションの問題

我々はこの論文で、スピノザが人間の認識能力を一種のコミュニケーション能力として理解していたという解釈をもとに、『エチカ』における「共通概念」の位置づけを試みよう。我々はコミュニケーションという概念を、複数の人間のあいだの相互作用という意味で用いるが、『エチカ』では、この相互作用は表象を媒介しておこなわれ、他者に対する愛や憎しみのような情動をともなうと考えられている。しかしスピノザは、このようなコミュニケーションよりも高次のレベルに、理性的コミュニケーションを置いた。スピノザにおいて、理性と表象（想像）は対立するものだが、それらはともにコミュニケーションに結びつけられている。もちろんそれらは、異なったコミュニケーション様式に結びついていると考えられるのである。それゆえ、人間が表象（想像）による認識から理性による認識へ達する過程そのものが、コミュニケーション様式の変化をもとに考えられるのである。

実践哲学

こうして、スピノザは認識論と実践哲学を重ね合せる。そして表象（想像）による認識から理性による認識への移行を可能にするものとして、「共通概念」というものが導入されるのである。それはすべての人間に共通のものの概念であり、その認識は真の意味で人間を共同させるとスピノザはいう。「共通概念」による認識をもとに他の人間と共同する能力、それがスピノザのいう理性である。このように、認識能力をコミュニケーション能力として解釈すれば、「共通概念」の理論的位置づけも明瞭になる、というのが我々の解釈の基本的な立場である。では、「共通概念」による認識とはどのようなものか。そこに到るコミュニケーション様式の変化はいかに生じるのか。以下では、『エ

チカ』の議論をもとにこの点を明かにし、それをとおして我々の解釈の妥当性を証明しよう。

1 集団性と個体性

認識の様式

スピノザは、表象（想像）による認識を第一種の認識、「共通概念」による認識ないし理性知を第二種の認識、そして本質の認識ないし直観知を第三種の認識と呼ぶ（II, 40 sc.2)。これら三種類の認識は人間精神の認識能力の三つの様式であり、それらには共同体におけるコミュニケーションの様式が対応している(1)。我々が以下で再構成していくのは第一種の認識から第二種の認識への過程であるが、この過程には次のようなコミュニケーション様式の変化が対応する。すなわち、表象による認識が理性的認識へと変貌するということは、感情（ないし情動）に従属し、孤立した人間どうしが、共通の善を求めて共同するようになるということを意味するのである。

しかし我々はなぜ第一種の認識から出発しなければならないのか。スピノザによれば個体は集団という形式の下で現実存在するように決定されているが、そのような個体のあり方の内に、我々が第一種の認識から出発せざるをえない理由がある。この点を理解するために、スピノザの形而上学における人間の存在の形式からみていこう。

有限様態としての人間

スピノザによれば自然の中には神という唯一の実体しか存在せず（I, 14 cor.1)、すべての個体はその有限な様態であると考えられる（I, 15 pr. dem.)。いうまでもなく、人間もまたそのような有限な様態である（II, 10 cor.)。人間は精神と身体から成るが、その精神とは思惟属性の下でみられた神の様態であり、またその身体とは延長属性の下でみられた神の様態である。では、このことは我々にとって何を意味するのか。この点を明らかにするために、いわゆる心身平行論について考えてみよう。

心身平行論

スピノザによれば、神とは無限に多くの属性によって構成される、絶対に無限な実体である（I, def.6)。それらの属性は実在的に区別されるが、すべて神の同一の本質を表現していると考えられるのである。では無限に多くの属性において表現される神の本質とは何か。それは「現実存在し活動する能力」（I, 34 dem.）であるといわれる。したが

って思惟属性においても延長属性においても、ともに神の活動能力が表現されているということになる。換言すれば、思惟属性において生じることと延長属性において生じることは、神の活動能力によって生じることの二つの表現である。それゆえ延長属性の下で神から生じることは、思惟属性の下で同じ神によって認識されていなければならない（II, 3 pr. dem.）。

神の活動能力は無限であって、そこから「無限に多くのものが無限に多くの仕方で」（I, 16 pr.）生じる。それらが神の様態である。延長属性においては無限に多くの物体が産出されるが、神はそれらをすべて認識している。つまり思惟属性において無限に多くの観念が産出されているのである。スピノザによれば、それぞれの属性において産出されるものの系列は、必然的な因果系列をなす。スピノザは観念の因果系列を「観念の秩序および連結」（II, 7 pr.）と呼び、また物体の因果系列を「物体の秩序および連結」（ibid.）と呼ぶ。神の属性のあいだには実在的区別がたてられているので、異なった属性の様態のあいだには因果関係は存在しない（II, 5, 6 pr.）。物体と観念は、ただ同一の因果性に従っているのである。「観念の秩序および連結と、物体の秩序および連結は同一である」（II, 7 pr.）。

これが、実体の諸属性の実在的区別と神の本質の同一性から導かれる、いわゆる心身平行論である。我々にとって重要なのは、このような形而上学的思弁の中で、精神と身体から成る人間という神の有限様態が、どのように位置づけられているかである。それを次にみてみよう。

身体の観念と身体の変様の観念

我々の身体は、延長属性の下で他の物体とともに神から産出されたものであるが、神はそれを認識している。つまり我々の身体の観念が、他の物体の観念とともに思惟属性の下で神から産出されている。こうして自然の無限系列の一部として神から産出された我々の「身体の観念」（II, 19 dem.）、それが我々の精神にほかならない。我々は、この主張から、人間のあり方に関する二つの帰結を引き出してみよう。

神から産出される無限系列が因果系列であると考えられている以上、我々の身体およびその観念である我々の精神は、他の物体ないし観念によって、現実存在し一定の作用を生み出すように決定されている。ところがこの他のものもまた同様に決定されており、「こうして無限に進む」（I, 28 pr.）。このように、各々の個体は他の多数の個体とともに相互作用の系列を形づくり、その限りで現実存在しうるのである。換言すれば、個体は

つねに集団の中で存在するのである。これがまず第一の帰結である。

第一の帰結が存在論上のものであるのに対して、第二の帰結は認識論上のものである。我々の身体をありのままに認識しうるのは、身体が産出される因果系列をすべての原因からたどることのできる「無限知性」(I, 16 pr.)、つまり思惟属性において活動する神だけである。これに対して、無限の因果系列の中で、その一部分として現実存在する我々は自己の身体を決定している因果系列をたどりつくすことなどできず、したがって我々自身の身体をありのままに認識することができない。「人間精神は人間身体を認識しない」(II, 19 dem.) といわれるのはこの意味においてである。

我々の精神の中には我々の「身体の観念」はない。それゆえ我々は自分自身が何であるかを知らないのである。しかしだからといって、我々は何も認識しないのではない。集団の中で現実存在する我々の精神の中には、外部の物体が自己の身体に与えた結果の認識が存在するからである。それは「身体の観念」ではなく「身体の変様の観念」(II, 19 pr.) と呼ばれる。我々はこの観念を通して、自分が何であるかではなく、集団の中での自己の状態を知るだけなのである。このように、我々は集団の中で、自分自身が何であるかを知らずに現実存在する。これが、人間は神の様態であるということの、我々にとっての意味である。スピノザは、こうした人間の存在の条件を、いくつかの概念を用いて規定し直している。我々は次にそれらを整理した上で、今度は「共通概念」による認識が我々にとって何を意味しているかを明確にしてみよう。

不十全な観念

身体の変様の観念は、現実存在する我々の精神に与えられる最初のものであるが、それは諸事物が神から産出される必然的な因果系列をありのままに再現しない「混乱した観念」(II, 28 pr.) である。スピノザはこのような観念を「不十全な観念」(II, 35 pr. dem.) と呼ぶ。そしてこのような観念をもつ限り、我々は「受動」(III, 1 pr.) であるといわれる。というのは、このとき我々の身体は外部からの作用によって決定されており、また我々の精神も外部からの作用によって身体に与えられる結果を通してしかものを認識していないからである。我々の精神にはものの表象が現れているが、それがなぜそのように現れているかを精神は全く認識していない。換言すればその原因を知らない。この意味で、不十全な観念は「前提なき結論」(II, 28 dem.) といわれる。

我々は身体の変様の観念を通して「自己の身体」と「外部の物体」を認識するだけでなく、身体の変様の観念そのものを反省することで「自己の精神」を認識するが (I, 19, 22,

23, 26 pr.)、身体の変様の観念がそもそも不十全なものであるがゆえに、これらもまたすべて不十全な観念である（II, 25, 27, 29 pr.)。そしてこれが表象による第一種の認識である。我々はすべてここから出発するのである。これに対して、我々が与えられた結果の認識によってでなく、自ら内的に思惟能力を行使してものを認識するとき、我々は「十全な観念」（II, 34 pr. dem.）をもち、その限りで「能動」（III, 1 pr.）であるといわれる。そしてこれが「共通概念」による第二種の認識である。

では我々はいかにして受動から能動になるのか。あらかじめ与えられている不十全な観念を、いかにして十全な観念にかえるのか。この過程が問題である。この認識様式の変化にコミュニケーション様式の変化が対応していることはすでに指摘しておいた。受動である限りでの我々に生じる様々な情動（affectus）を秩序づけ、理性的になることで我々のコミュニケーション様式は孤立から共同へと変化するのである。しかし集団の中での相互作用から、いかにして情動が生じるのだろうか。また人間は受動的な情動に捉えられている限り、集団の中で存在しながら孤立してしまうのはなぜなのか。この点を明らかにしておいた上で、我々が「共通概念」へといたる認識の秩序を考えてみよう。

情動の理論

神の様態である人間は、神の本質である活動能力を一定の仕方で表現していると考えられる（III, 6 dem.)。このことは、人間の本質は自己自身の存在を否定するようなものを含んでいないということを意味している（III, 4 dem.)。したがって我々の精神も身体も、それ自身の存在に固執するという本性、すなわち「コナトゥス（conatus)」（III, 6-9）をもつ。身体のコナトゥスは自己自身を個体として維持しようとする作用であり、精神のコナトゥスはそのような作用をもった身体の現実存在を肯定することである（III, 10 dem.)。つまり、自己保存へ向かって作用する身体と、その現実存在を肯定する精神が我々である。スピノザは、心身のコナトゥスを「欲動（appetitus)」（III, 9 sc.）と呼び、また精神によって自覚された欲動を「欲望（cupiditas)」（ibid.）と呼ぶが、これら（コナトゥス、欲動、欲望）はすべて同じものを指していることに注意しておこう。

我々の身体はつねに外部の物体からの作用によって変様を被っているが（IV, 2 pr. dem.）ここで外部からの作用を我々の身体の保存に役立つものと、逆にそれを阻害するものとに大別してみよう。身体はそれらによって自己の活動能力を増大させるか、逆にそれを減少させるような仕方で変様させられている（III, 11 pr.)。我々の身体の変様（affectio）は身体の自己保存能力の増大ないし減少を伴うのである。ところで、延長属

性において表現される神の本質と、思惟属性において表現される神の本質は同一であった。したがって、延長属性の下での神の様態である我々の身体の活動能力が増大ないし減少するのと平行して、思惟属性の下での神の様態である我々の精神の思惟能力も増大ないし減少していることになる（III, 11 pr.）。そしてそれが「情動（affectus）」（III, 11 sc.）と呼ばれる。スピノザは、思惟能力が増大するときの情動を「喜び」、逆にそれが減少するときの情動を「悲しみ」と呼ぶのである（ibid.）。スピノザはこうした心身の活動能力の増大をより大きな完全性への「移行（transitio）」、その減少をより小さな完全性への「移行」と定義している（ibid.）。つまり活動能力の増大および減少とは時間的な持続を含む状態であり（III, 8 pr. ）、精神はそれを喜びおよび悲しみの情動として意識しているのである。

このように我々の身体が外部の物体の作用によって変様を被る限り、我々は何らかの情動を経験するだろう。しかし人間の本質は自己の存在に固執するコナトゥスないし欲望である以上、精神は身体の自己保存に役立ち、その活動能力を増大させるものを「善」（IV, 8 pr. dem.）であると意識し、それをできるだけ表象しようとするだろう（III, 12 pr.）。また逆に、それを減少させるものを「悪」（IV, 8 pr. dem.）であると意識し、その表象を排除しようとするだろう（III, 13 pr.）。換言すれば、自己の喜びの原因となった事物を表象しようとし、逆に悲しみの原因となった事物の表象を排除しようとするだろう。これらがそれぞれ「愛」と「憎しみ」（III, 13 sc.）である。

こうして人間どうしの相互作用から、愛や憎しみのような他者の認知を伴った情動が生じ、その情動を通して共同体が成り立つのである。しかし、我々がこのようなコミュニケーション様式にとどまる限り、共同体を形成しつつも、けっして真の意味で共同することはありえない。何故か。身体の変様の観念は自己の身体と外部の物体の本性を含む（II, 16 pr. dem.）が、外部の物体の本性よりも自己の身体の状態をより多く表示する（II, 16 cor.2）。したがって、多数の人間が同一の対象から作用を受けたとしても、各々の人間に生じる情動は相互に異なりうるし、同一の人間でさえ同一の対象から異なった仕方で作用を受け、全く反対の情動をもつことが可能である（III, 51 pr.）。しかも人間身体はきわめて多くの物体から作用を受ける（II, 14 pr. dem.）ので、情動には無数の種類がある（IV, 33 dem.）。それゆえ人間が外部からの作用の結果を認識している限り、人間どうしが一致するということはまれである。むしろ、人間は受動である限り対立的でありうる（IV, 34 pr.）。こうして人間は、受動である限り、集団の中で活動しつつ、じつは自己の情動の中に閉じられて孤立しているのである。

これに対して、人間は理性的に生活する限り相互に一致する（IV, 35 pr.）とスピノザはいう。というのは、理性的である限りでの精神によって認識される善は、すべての人間に共通のものだからである。それが「共通概念」による第二種の認識の対象にほかならない。では「共通概念」による認識の対象はどのようなものか。我々が「共通概念」による認識を獲得しうるとすれば、それは何によるのか。これが問題である。

2 共通概念

共通概念としての延長

「共通概念」による認識の対象は何だろうか。スピノザの一般的な理論提示をみてみよう。それは「すべてのものに共通であり、ひとしく部分の中にも全体の中にもあるもの」（II, 37 pr.）である。すべてのものに共通である限り、それが「個物の本質を構成しない」（ibid.）のは当然である。しかしそれは「十全にしか考えられない」（II, 38 pr.）。つまり第一種の認識によっては理解されないものである。

これでは形式的すぎて何のことか見当がつかない。しかしスピノザは、人間精神が認識する対象は現実存在する延長の様態以外にはない（II, 13 pr.）といっているし、我々の身体と外部の物体が相互作用をおこなっている以上、それらには共通の本性がなければならないといっている（IV, 29 pr. dem.）。そう考えると、「共通概念」による認識の対象は延長の様態であると解釈するのが適切である。ただし延長といっても次の点に注意すべきである。デカルトにおいては、延長は純粋に幾何学的なものとして考えられたが、スピノザにとっての延長は神の活動能力を表現する属性のひとつであり、幾何学的でなく力動的なものである。このような延長概念は、デカルトのように、身体と外部の物体の相互作用から生じる混乱した観念を否定して、ただ知的に考えることによってでなく、活動能力の増大ないし減少をもたらす、身体の変様という具体的な経験の中から見出されなければならないものなのである。

ところが第一種の認識にはこのような延長概念は与えられていない。そこにはものの表象という不十全な観念があるにすぎない。我々は外部の物体をただ喜びや悲しみの原因として表象しているにすぎず、自己の身体は精神の自由な意志決定にしたがっていると勝手に想像している（III, 2 sc.）。つまり、身体と外部の物体の共通本性を我々は何ら認識していない。それどころか、第一種の認識は、我々を自己の情動の中に閉じ込めて孤立させることで、共通本性の認識から我々を遠ざけてさえいる。それならば、我々は

いかにして「共通概念」による認識へ進むことができるというのだろう。

アリアドネの糸

スピノザによれば、「共通概念」による第二種の認識に達する手がかりは、じつは不十全な観念から生じる情動の中にある。ただし悲しみの情動ではなく、喜びの情動の中にである。何故か。身体の活動能力が増大し、精神が喜びを感じるとき、その原因となった外部の物体は、我々の身体の個体性の維持に役立つものでなければならない。このとき我々の身体と外部の物体は、共通の本性をもつ（IV, 30 dem.）。これに対して、身体の活動能力が減少し、精神が悲しみを感じるとき、その原因となった外部の物体は身体の個体性を破壊しようとしており、したがって我々の身体と適合するような共通の本性をもたないと考えられる。したがってただ喜びの情動のみが「共通概念」への通路である[(2)]。そして喜びはまた、自己意識の内部からその外での共同への通路でもある。だがそれはいかなる意味においてか。この点を考えていこう。

運動と静止の割合

我々に喜びをもたらすのは、身体の個体性の維持に役立つものであった。しかし身体の個体性とは何か。この点からみていこう。スピノザによれば、人間身体の個体性を構成するのは、身体の諸部分が相互に保っている「運動と静止の割合」（II, lem.5, 6） である。この割合が維持されるようにするものが善であり、逆にそれが破壊されるようにするものが悪なのである（IV, 39 pr. dem.）。この割合を維持しようとするのが、延長属性において神の本質を表現する活動能力つまりコナトゥスである。人間身体（ないし物体）とは、運動と静止の割合を維持しようとして持続的に変化する、延長の様態にほかならない。

自然全体について考えてみよう。それは、無限の個体がその運動と静止の割合を維持しつつ結合することによって構成された「ひとつの個体」（II, lem.7 sc.）である。自然全体がもつ運動と静止の割合を維持しているのは、神の無限な活動能力である。この能力は、自己原因である神が現実存在する能力であるがゆえに、外部から限定されることができない。つまりそれは、まったく「否定を含まない」（I, def.6）純粋に積極的なものである。ところで「共通概念」の対象は「ひとしく部分の中にも全体の中にもあるもの」であった。全体の中には、このように外部からの否定を含まない自律的な活動能力によって維持される運動と静止の割合があるだけである。ところがそれは、部分の中に

もあるといわれている。すなわちそれは、自然の一部である我々の身体にも、外部の物体にもなければならない。しかし、ここで問題が生じる。

有限な様態である我々の身体は、つねに外部の物体から限定を受ける（IV, 3 pr.）。したがって身体の運動と静止の割合は、ただ自己自身の力のみによってでなく、外部の力によって変様を被る（IV, 4, 5 pr.）。我々は自己の身体の個体性を維持しようとするコナトゥスをもつにもかかわらず、身体の個体性は、純粋に自己自身の力によって維持されてはいないのである。受動的な情動の中で、我々の欲望は外部の物体に対する愛や憎しみに変様してしまい、専ら自己の個体性の維持へ向かう身体を認識していないのである。これに対して「共通概念」による認識とは、我々の身体を、自己保存のコナトゥスによって自律的に維持されるものとして肯定することである。そのための通路として、喜びの情動が注目されたのである。では喜びはなぜ我々を受動から能動へ変える契機であると考えられるのか。この点をみていこう。

身体の能力

スピノザは、精神と身体が同一秩序にしたがっているという主張をもとに、我々がよく知ることのできない精神のあり方を身体をモデルにして明かにしようとしている。この点は、これまでみてきた議論の中にすでに読みとられるだろう。そして以下でみるように、喜びと「共通概念」による認識との関係も同様の仕方で考えられているのである。

我々自身のもつ力に比較して、我々の外部の力は無限に大きい。したがって我々の身体が単独で受動という状態から出ることは絶対に不可能である。ところで悲しみの情動は、我々の身体を単独の状態においてしまう。悲しみとは、身体の活動能力の減少を示唆しているが、このことは身体と外部の物体に共通性はないということを意味する。なぜならもしそれらに共通性があれば、それによって活動能力が減少することはないからである（IV, 30 dem.）。それゆえこの限りで我々の身体は単独で自己保存に努めねばならない。ところが外部の力はその力を無限に上回るので、結局身体は受動という状態から出ることができないのである。

他方、喜びの情動は身体の活動能力の増大を示唆する。活動能力の増大は単独では不可能であり、共通の本性をもつ外部の物体からの作用を前提している。身体と外部の物体が適合的な関係にたつとき、それらは相互に限定しあうことなしに、各々の運動と静止の割合を維持することができるのである。こうして活動能力の増大から、能動への転換が生じると考えられるのである（IV, 59 dem.）。この意味で、我々が能動的になる機

会は喜びの中にしか存在しない[3]。ところで身体の受動および能動は精神の受動および能動と同時である（III, 2 sc.）から、身体が能動になるのと平行して、精神も能動の状態に移行していると考えられる。それが不十全な観念から十全な観念への移行であり、第一種の認識から「共通概念」による第二種の認識への移行なのである。

スピノザの形而上学において、我々の精神と身体は、集団の中でのみ現実存在しうる有限な様態である。有限な様態という存在論的な条件が変わらない限り、我々は受動であっても能動であっても集団の中で存在し続ける。それゆえ我々の認識様式の変化とコミュニケーション様式の変化は、たんに対応しているだけでなく不可分の関係にある[4]。我々の精神は身体と同一秩序のもとに存在している以上、身体が単独で自己の個体性を維持することができないのと同様に、精神も単独では思考することができない[5]。我々が受動でも能動でもこのことに根本的な変化はない。ただそれらは異なったコミュニケーション様式と結びついているのである。スピノザは、このような観点から、人間精神が理性的になる過程を、専らコミュニケーション様式と対応した形でとり出そうとしたのである。では能動的になり、理性という認識様式を獲得した精神にはどのようなコミュニケーション様式が結びついているのだろうか。最後にこの点をみていこう。

理性と共同体――結論――

理性的な精神は、外部のものを、自己に作用して偶然に喜びや悲しみの原因となるものとして認識するのではない。そのような認識は受動な精神のもつ認識である。我々の精神がもつコナトゥスつまり欲望は、我々が受動的であっても能動的であっても作用している[6]。受動的な第一種の認識においては、我々は身体の活動能力を増大させるものを欲望し、逆にそれを減少させるものを排除することを欲望したのである。これに対して能動的な第二種の認識においては、我々は自己の身体の本性と一致するものを欲望するようになる。このとき我々の精神は、外部のものを喜びや悲しみの原因としてでなく、身体の自己保存にとって有益かそうでないか、という観点から認識するだろう。身体の活動能力と精神の思惟能力の本質は同一のものである以上、身体の自己保存に役立つものとは、同時に精神の十全な認識に役立つものにほかならない（IV, 26 pr. dem.）。結局、理性的な精神は理性的に認識することのみを欲望するのである。

このような観点から、人間にとって最も有益なものは人間であるということになる（IV, 18 sc.）。なぜなら、自己の身体がもつ運動と静止の割合と最も容易に適合するものは、類似した運動と静止の割合をもつ他の人間身体にほかならないからである（IV, app.9）。

そしてとりわけ、理性的な人間どうしが相互に最も有益であることはいうまでもない(IV, 35 cor.1)。なぜなら理性的な人間は自己に有益なものしか欲望しないが、その対象は自己の身体と他の身体に共通のもの以外にないからである。それゆえ理性的な人間は、まず第一に他の理性的な人間と共同することを欲望するはずである。こうして各々の人間が自己に有益なものを欲望するとき、彼らは必然的に共同し、かつ自己の個体性をよりよく維持しうるのである（IV, 35 cor.2)。そしてもし、共同体に属するすべての人間が理性的になったと仮定すれば、そのような共同体の中ほど、各々の人間が自己の本性をより多く実現できる場所はない。したがって理性的な人間は、他の人間もまた理性的になることを欲望するだろう（IV, 37 pr. dem.)。こうした欲望にもとづいて人間のあいだにとり結ばれる関係をスピノザは「友愛（amicitia)」(IV, 37 sc.1, app.12）と呼ぶのである[7]。

第一種の認識様式に対応するコミュニケーション様式は、「孤立」と「対立」であった。これに対して第二種の認識様式に対応するのは「共同」と「友愛」である。理性とは人間の共同と友愛を可能にする高次のコミュニケーション能力として理解されるのである。第一種の認識において、我々は身体の変様の観念しかもたず、しがって自分が何であるかを知らなかった。しかし第二種の認識においても、我々はまだそれを知っているわけではない。「共通概念」の対象は「個物の本質を構成しない」のである。自己の本質は第三種の認識によってのみ知ることができる。しかしスピノザによれば、我々は「共通概念」による第二種の認識を経てのみ、第三種の認識への欲望をもちうる(V, 28 pr. dem.)。つまり、ただひたすら自己意識の内部を注視する精神ではなく、かえってその外に出て、他のものと共同してはたらく精神のみに、自己の本質の認識が開かれているとスピノザはいっているのである。

註

(1) 認識とコミュニケーションの対応を強調する解釈の代表的なものとして、Balibar, pp.91-118を指摘しておく。

(2) この点に関する解釈は、Deleuze, 1968, pp.252-267, 1981, pp.37-43.にしたがう。

(3) ただし、過剰な喜びは悲しみと同様に悪である。なぜなら過剰な喜びとは特定の対象によって身体の一部分のみが変様させられる事態を指すが（IV, 43 dem.)、それによって身体全体のもつ運動と静止の割合がくずされてしまうからである。他のものには目もくれず、ひたすら金銭や名誉を得ることを欲望する人は、こうした過剰な喜びに捉えられているのである（IV, 44 sc.)。これに対して、我々を能動にするような喜びは、身体のすべての部分が運動と静止の同じ割合を維持す

るような仕方で、その活動能力を増大させるようなものでなければならない（IV, 42 dem.）。スピノザはこのような喜びを過剰な喜びである「快楽（titilatio）」から区別して、「快活（hilaritas）」と呼ぶのである（III, 11 sc.）。

(4) cf. Balibar, p.115

(5) cf. Balibar, p.117

(6) cf. TP, II, 2

(7) この点は、Matheron, p.267から示唆された。

文献

- *Ethica* の参照箇所は、各部をローマ数字で、定理その他の番号を以下の略号とともにアラビア数字で、すべて本文中に示す。definitio / def., propositio / pr., demonstratio / dem., corollarium / cor., scholium / sc., lemma / lem., appendix / app.
- なお訳出にあたって次のものを参考にした。*L'Ethique de Spinoza*, traduction de Guériot, éd. Ivrea, 1993. *Ethique*, texte original et traduction nouvelle par Bernard Pauturat, éd. Seuil, 1988. 畠中尚志訳『エチカ』岩波文庫、一九七五.
- *Tractatus Politicus* の参照箇所は、略号 TP を用い、各章をローマ数字で、各節をアラビア数字で示す。

Etienne Balibar, *Spinoza et la Politique*, puf, 2e éd. 1990.

Gilles Deleuze, *Spinoza et le Problème de l'expression*, éd. Minuit, 1968.

———, *Spinoza: Philosophie Pratique*, éd. Minuit, 1981.

Alexandre Matheron, *Individu et Communauté chez Spinoza*, éd. Minuit, 1969.

〔哲学博士課程、日本学術振興会特別研究員〕

Position «des notions communes» dans *L' Ethique* de Spinoza
——puissance de la raison et sa nature collective——

Kenji SHIBATA

L'Ethique de Spinoza est un livre qui a renouvelé l'image de la connaissance rationelle. Il nous invite à penser la connaisance en fonction de la communication, ce qui fait que si on peut parvenir à la connaissance rationelle, c'est par voie de communication qui se tient entre nous. Le problème de connaissance se transforme ainsi en celui d'ordre éhique, puisque nos communications ne vont pas sans les passions, qui sont dans la plupart des cas contre la raison. Atteindre la conaissance rationelle signifie donc, se dégager des passions, et par suite devenir actif. Et si nous le pouvons, c'est grâce aux *notions communes*, qui sont les notions des choses communes à tous les hommes, donc communicables entre eux. Notre but dans cet exposé consiste dès lors, dans la mise en lumière du rôle théorique des *notions communes* qui est l'inspiration physico-éhique par excellence, et par là même le sens renouvelé de la raison, lequel est la cléf de voût de tout *L'Ethique*.